カントの動機論

（一）

濱岡宏亘

カントの哲學を正しく理解することは、淺學菲才の我々に於ては容易なことではない。然し敢てするならばその或る一部分を窺ひ知ることは許されるであらう。こゝにはカントの著『實踐理性批判』の第三章「純粹實踐理性の動機に就いて」を跡づけることによつて、カントの哲學の片鱗を窺ひ見ようと思ふ。

先づ順序としてカントの哲學を大觀し、「純粹實踐理性」なるものはその哲學體系に於て如何なる地位を占めてゐるかを考察し、次いで動機論へ及んで行かうと思ふ

カントは「恰も近世哲學に於ける貯水池の位置にある人である。」と云はれてゐるが如く、カントの哲學の意義は、カント以前の哲學の主なる對立的要素を集大成し統一することによつて、哲學に全き體系と確固たる基礎を附與すると共に幾多の重大な問題を殘して後代哲學の源泉となつた點に存するのである。カント哲學は「批判哲學」と呼ばれる如く、カントがその哲學を成し遂げる爲に用ひた原理は批判であつた。即ちこの「批判」を原理とすることによつて、從來の所謂獨斷的な諸哲學を一面的皮相的立場から救出して、一層全き哲學の一要素に包括すると共に、カント自身の哲學をして單なる折衷調和の立場を超脱せしめて獨自の價値ある哲學たらしめたのである。

カントの批判哲學は先づ認識論即ち『純粹理性批判』となつて現れ、智識批判を以て第一着歩としたのである。而してこの認識論はカント哲學全體に於ても、又哲學史上に於ても最高位の客觀的價値を占めてゐると云はれる

カントはこの認識論を根據として認識論の精神と方法とを應用して他の論議をなしたのである。然しながらこの認識論のみを以てカント哲學と見ることは勿論、認識論を以てカント哲學の主要部と見ることも謬見である。カント哲學の目的は單に認識論の完成にあつたのではなくて、全體としての哲學を完成することによつて、全體としての人間又は自我の價値を高めんとする所にあつたのである。極言すれば、カント哲學の精髄は道德論であると言つても過言ではなく、事實カントの哲學體系を通じて流れる基調は道德的世界觀の樹立にあつたのである。

或るカント哲學研究者に隨ふとカント哲學は三大分野に分けられてゐる。卽ち認識論・道德論・藝術論の三である。こゝに考察を試みんとするのはその中の道德論特に動機論についてである。

カントが道德の原理について論じたものは『實踐理性批判』である。カントにとつては道德とは殆ど理性による感性の征服だといつてもよい。この理性とは普通にいふ單なる知識といふ意味よりは遙かに深く、それは人間をして人間たらしめる本質である。この理性は無法則ではない。然し理性の法則は理性以外のものによつて與へられたり、支持せられたりするものではなく、それは飽くまでも自分自身によつて規定せられるものである。卽ちこれが理性の自律であつて、道德の法則は畢竟この自律の表はれに外ならない。かくて道德的法則が自律を以て本質とすることは、カントの道德說の骨子である。カント理性を理論理性と、實踐理性とに峻別したのである然らばこの兩者は如何なる關係を有するかといふことについて一言すれば、この兩者は先驗的・普遍的・必然的であるといふ點に於ては同樣であるが、前者は認識を職能とし自然又は現象を對象とするに對して、後者は實踐を職能とし道德又は本體界を對象とする點に於てその趣を異にする。而して自然の世界は時間・空間・因果の制約の下に立つ世界であり、本體の世界は時間・空間・因果を超越した自由の世界であり、隨つて現象以上の世界であることは言ふまでもない。

換言すれば認識の世界はあくまでも現象界に終始し、

道德の世界は現象以上の本體界へ頭をつゝ込む。こゝに實踐理性と理論理性との區別があり、而して實踐理性は理論理性に對して優位を占めるのである。

この實踐理性を中心としたものがカントの道德論であり、その道德論の目的は、理性が意志を規制し得るか否かを明かにして、道德の普遍妥當性の根據を確立し道德の成立を可能ならしめることにある。普遍妥當性はカント哲學に缺くべからざるものであつて、道德の成立は個人の特殊な經驗的感情によつてゞなく、一切の道德的判斷の根抵に存する普遍妥當的な法則によるのである。實踐理性はそれが自分自身に與へる普遍妥當な法則に從ひ得るのみである。この根本法則が卽ちカントの道德論の中核をなす所の道德律である。カントによればこの道德律の概念は、苟も自覺したる人間である以上總ての人が持つてゐねばならぬものであり、カントに於ては深刻にして森嚴なものであつた。卽ち「それを考へること屢々にして且つ長ければ長き程、常に新たにして增し來る感歎と崇敬とを以つて心を充たすものが二つある。それは我が上なる星の輝く空と、我が內なる道德律とである。」（岩波文庫實踐理性批判二〇三頁）と言つてゐる如く星ある空は宇宙の森嚴を示すものであり、我々の中にある道德律は人間の人間たる尊さを示すものであるとした。

カントの動機論とはこの道德律と意志の關係、換言すれば意志が如何なる動機を以て行爲した時、その行爲を善なる行爲、卽ち道德的價値を有する行爲と言ふのであるかといふことを說いたものである。隨つてカントの道德論は善惡の行爲評價を結果によつて決せんとする結果論ではなくして、動機の如何によつて決せんとする動機論であることは言ふまでもない。然し凡そ動機論には狹義の動機論と廣義の動機論とに區別することが出來る。卽ち前者は動機中の中心たる目的觀念さへ正當ならば、これが實現には如何なる手段を取るも決してその行爲の善たるを失はぬといふ極端なる主觀的動機論であり、後者はその目的觀念のみならず、之を實現する手段方法も必ず含むと見、是等目的・手段全體としての動機を評價の唯一の對象とする客觀的動機論である。カントの動機

論はこの後者に含ませ得るものであるけれども、それは自ら特異の地位を占めてゐるのである。即ちカントに從へば、或目的を設定し之を實現する處に道德が成立すると見るのは、それが如何なる形に於て說かれても凡て道德をば目的實現の手段と見做すもので是れ他律的である。眞の道德は自律的でなくてはならぬ。自律意志こそ絕對價値ある善意であるといふ。即ちカントの動機論は自律主義である點に特異性を持つてゐるのである。

カントは『實踐理性批判』の第三章劈頭に「行爲の凡ゆる道德的價値の本質をなすものは、道德律が直接に意志を規定することである。」(岩波文庫實踐理性批判九五頁)と述べてゐる。即ち善なる行爲、道德的價値を有する行爲とは意志が道德律の直接な規定を動機として行爲した行爲をいふのである。故に道德的行爲に於ける意志の動機は道德律以外のものではない。換言すれば道德律に飽くまでも從はんとする義務から爲された行爲、更に換言すれば道德律に對する尊敬の一念から生じた行爲が道德性を有する行爲であつて、唯外形のみが道德律に從つてゐてもそれは適法性を有するに過ぎずして何等道德的價値を有しない。そこでカントに於ては如何樣に道德律が動機となるかといふことを規定するのであつて、道德律が如何にして直接に意志の規定原理たり得るかは解くべからざる問題である。「道德律による意志の凡ての規定に於いて本實的なものは、意志を自由意志として、從つて單に感覺的衝動の共働なきのみならず此等のものを悉く排斥することによつて、また道德律に反對する限り凡ゆる傾向性を抑別することによつて、單に道德律によつて規定するといふことである。」(同上九六頁)即ち道德律ばかりで意志を規定するのであつて、凡ゆる感情・好惡・氣分を排斥したのである。

これカントの道德論が嚴肅主義と呼ばれる所以である然し道德に於て若し感情的要素を口にし得るとすれば、それは唯道德律に對する尊敬、及びこの尊敬から好惡や感覺の誘惑に打克つたといふ自己克服の喜ばしい神聖な氣分位のものである。この感情は經驗的根源から發したものではなく、先天的に認識せられる積極的感情であ

る。故に道德律に對する尊敬は知的根據によつて生ぜられる感情である。そして「この感情は吾等の全然先天的に認識し得る、又其必然性を洞察し得る唯一の感情である。」(同上九七頁)嚴密に言ふならば「法則に對する尊敬は道德性の動機ではなく、主觀的に動機として考察せられた道德性そのものである。」(同上一〇〇頁)「この道德的感情の名の下に呼ばるゝ感情は、全然理性によつて生ぜられるものである。……而してそれは單に法則を自分自らに於て格率とする爲めの動機として役立つ丈けである。」(同上)かくの如くこの感情は感覺的なものとは比較することの出來ない無類の感情なるが故に「道德律に對する尊敬は唯一にして且つ疑ふべからざる道德的動機である。」(同上一〇三頁)故に尊敬は「活動の主觀的原理として、換言すれば道德律遵奉の動機として且つ道德律に徒ふ生活の格率の根據として見られねばならない。」(同上一〇四頁)のである。而してこの尊敬を要求し、且つ注入する法則は道德律に外ならぬ。この純粹にして凡ゆる利益を離れた道德律を遵奉することを命ずるものは實

(五)

踐理性である。かくの如く道德律は、「實踐理性によつて行爲の形式規定原理となり、又行爲の對象の客觀的な規定原理となると共に又主觀的規定原理卽ち行爲を起す動機ともなるのである。(同上九九頁)何故に主觀的規定原理となるかなれば、人間が其本性の感覺的性癖と道德律とを比較するとき、道德律はこの感覺的性癖卽ち傾向性を破碎して吾等の自覺に於いて吾等を謙抑せしめるのであり、かく道德律が吾等の意志の規定原理である限りに於いて、それ自ら尊敬を喚起するが故である。

「法則に從つて、傾向性に基く凡ての規定原理を排斥することによつて、客觀的に實踐的な行爲は義務と言はれる。」(同上一〇五頁)傾向性を排斥して客觀的に實踐的な法則に從はんとすることは實に容易なことではない。それ故に義務は實踐的强制である。

然しこの强制の意識より發生する感情は感覺的ではなく唯實踐的である。此强制は理性の自己立法によつてのみ實行せられるのである。「義務の概念は、客觀的には行爲に於いて法則との一致を、又主觀的には行爲の格率に

於いて法則によつて意志を規定する唯一の仕方としての法則に對する尊敬を要求する。」(同上一〇六頁)さうして客觀的なものは義務に叶へる樣に行爲したといふ意識、卽ち適法性であり、主觀的なものは義務から換言すれば法則に對する尊敬から行爲したといふ意識、卽ち道德性である。然し道德的價値は行爲が義務から起るといふ點にのみ置かれねばならぬ。隨つて凡ゆる格率の主觀的原理を極度の嚴密さを以て注意することは、我等の凡ての道德的評價に於て重要である。

「道德律は最も完全なる存在者の意志に對しては神聖性の法則であるが、凡ての有限的理性的存在者の意志に對しては義務の法則、卽ち道德的强制、並に彼の行爲を法則に對する崇敬によつて規定することの法則である」。(同上一〇七頁)而して意志を强制する所の客觀的原理の表象は命令と呼ばれる。それは凡て「爲すべし」に依つて表現される。カントは、道德律は無條件的・定言的であつて、意志はこれによつて直接に然も絕對的に支配せられると言つてゐる。何となればこれこそは純粹實踐理性其れ自身の他によらずして自ら立てる法則だからである。卽ち「純粹理性はそれ自身に於いて實踐的であつて道德律と名づくる普遍的法則を人間に與へる。」(同上四四頁)のである。かくの如き法則は自分が欲求する結果を實現する能力を有するか、これを實現する爲には何を爲すべきかといふやうな條件、更に進んでは何が實現せられるかといふことを問題とすず、理性が理性自身に於て純粹に意志を規定する場合にのみ可能である。かくてカントの所謂純粹實踐理性の根本法則、卽ち根本的道德律たる「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥當し得るやうに行爲せよ。」(同上四二頁)といふ法則が導き出されるのである。然しこの法則は意志や行爲の對象、その內容實質について何等示す所なく唯その形式についてのみ示すのである。これカントの道德說が形式主義であると呼ばれる所以である。

「人間が立つ所の道德的階段は道德律に對する尊敬である。彼が道德律を遵奉することに於いて持たねばならぬ心術は、それを自發的な傾向から又は命ぜられざる、ひ

とりでに好んで企てられたる努力からではなく、義務から、遵奉するといふことである。」（同上一一一頁）かくてカントの道德論に於て最も重大なものはこの義務の概念である。義務は傲慢並に自愛を碎くものであり、人間に於ける凡ゆる道德性の最高の重要な原理である。「偉大なる犧牲を以て而も全然義務の爲に起つた他人の行爲は高尙にして崇高な行爲の名の下に賞せられるであらう併しながらそれは單にその限りに於いても、其等の行爲が興奮せる感情からでなく全然彼の義務に對する尊敬から起つたことを推察せしむる痕跡のある場合に於いてのみ許される。」（同上一一一頁）即ち、唯義務の爲に義務を行ふといふ行爲こそ道德的價値を有し、且つ高尙・崇高なる行爲といふべきである。カントは次の如く義務を讃美してゐる。

「義務よ！　汝崇高にして偉大なる名よ。汝は人の氣に入りさうな何物をも持つてゐずに服從を要求するが、しかも意志を動かさんが爲に心に於ける自然的嫌惡と恐悸とを惹起する何物をも脅迫せむとせず、單にひとりでに心に入り來つて而も不承不承の尊敬を獲得する法則を提供する。この法則の前には凡ゆる傾向性は私かにそれに反抗しながらも沈默する。汝に値する起源は何ぞ。傾向性との凡ゆる血緣を誇らしげに峻拒する汝の高貴なる血統の根元は何處に見出さるべきぞ。人間が自らに與へる唯一の價値の必須の制約は如何なる根源から派生せらるべきぞ。」（同上一一三頁）

而して義務を生じ來る所のものは「まさしく人間を自分以上に高めるところの力、即ち彼を唯悟性のみが考へ得るところの、且つ同時に全感官界及び之と共に時間に於ける人間の經驗的に規定し得べき存在並に凡ゆる目的の全體を支配するところの、事物の秩序と結合するところの力である。」（同上一一三頁）この力は「人格性」であつて、「人格性」とは全自然の機制からの自由と獨立性とに外ならない。

「而も亦人格性は彼自身の理性によつて與へられたる純粹實踐的法則、即ち道德律に從ひ得る人間の能力、即ち理性自身が理性を律する自律の力と見られるのである。」

（同上一一三頁）されば人間は感覺界に屬し而も亦同時に超感覺界に屬するものである。而して人格を人格たらしめてゐるものは超感覺的性格である。故に感覺界の人格が己れ自身の人格に服從するといふことになる。それは彼自身の理性によつて與へられた純粋實踐的法則に服從するといふことゝ同じである。畢竟法則の尊敬はこの本來的自己への尊敬と同一である。換言すれば、「道德律は神聖である。人間は成程非神聖ではある。然し彼の人格に存する「人」は彼に對して神聖であらねばならない。」「彼は彼の自由の自律の故に神聖なる道德律の主體である。」（同上一一四頁）人格性は吾等の本性の高貴、それに對する尊敬を吾等に示し、同時にこれに關して吾等現實の人間の行爲適合性の缺乏を注意せしめ、之によつて自負を破碎するのである。

「彼は唯義務なるが故に生きる。生きることに於いて、少しでも快樂を見出すが故に生きるのではない。」（同上一一五頁）斯くの如きが純粋理性の眞正の動機である。而して此動機は道德律そのものに外ならない。

即ち「動機は吾等に吾等自身の超感覺的存在の高貴を感知せしめ、且つ主觀的に自己の感覺的存在と、之と結合して此點に於いて甚だ感覺的に感觸せられた本性に自己が依屬することを意識する人間の心の中に自己の一層高き本分に對する尊敬を生ぜしめる限りに於いて、純粋道德そのものに外ならない。」（同上一一五頁）のである。

かくて人間は生きることゝは全く異るものに對する尊敬から行爲し、この尊きものを目ざす義務の尊嚴は「人生の快樂と何の關はるところもない、それは自分獨特の法則と自分獨特の法廷とを有する。」（同上一一六頁）

以上與へられた紙面に於いてカントの動機論を大略跡づけた積りであるが、最後にカントの道德論を一瞥して見れば、カントが實踐理性の原理に於て示さんとしたことは、既に述べ來つた如く形式主義であつた。而してカントの道德論の主特質はこの形式性から導出せられて來ると思ふ。即ちカントにとつては道德は普遍妥當なものであり、法則的なものであるが而も自律的なものであり又、命令的なものである。而して命令は無上絶對なもの

である、同時に人間を以て目的そのものとする人格主義的道德である。隨つてカントは道德論上の快樂說や幸福說や功利說を極力排斥したのである。このことは卽ちカントの道德論が嚴肅主義と呼ばれる所以である。

編輯後記

一、去る四月二十一日午後四時於合同教室禪學研究會例會を開催、東北帝大教授鈴木宗忠博士の、「國家と宗教」に就いての御講演を拜聽、非常なる盛會裡に六時頃散會いたしました。御多忙の中をわざ〳〵本會の爲に御苦勞下さいました鈴木先生に厚く御禮申上ます。

二、今回都合によりまして會則の一部を變更致しましたから御了承下さる樣願ひます。

第四條(二)の「年三回發行」を「年二回發行」に變更、又、第七條の會費年額金壹圓貳拾錢を年額金八拾錢と改めました。

三、振替口座番號を訂正致しましたから御了承下さい。

四、本號所載の松倉全鼎君の卒業論文「大愚宗築禪師に就て」、は都合により特に編輯者の方で、歷史的方面のみを拔萃記載し、思想的な方面を省略させて頂きました。又題目も論文には「大愚宗築禪師の研究」とありましたのを「大愚宗築禪師に就て」と變更致しました。右編輯者の方からおことわり致します。

五、本號所載の勝峯修、濱岡宏亘兩君の論文は、昨年度の專門學校第三學年第二學期の禪宗要學及び倫理學のレポードであります。